

レッジョ・エミリア・アプローチに関する研究  
— 「環境を通した教育」の課題と新たな可能性—

学 校 教 育 学 専 攻  
教育コミュニケーションコース  
M 1 0 0 0 5 I  
木 下 孝 一

**【研究の目的】**

現代の幼児教育が、子どもの自発性を尊重していることは周知の事実である。しかし、その教育方法が確立されたとは言い難い。子どもの自発性をどのように保障し、発揮させるかという問題は、幼児教育の主要な課題の1つである。

子どもの自発性とは、外部からの影響ではなく、子ども自身の中で思考され、行動することによって発揮される。このような性質から、日本では環境を通して行う教育を、幼児期における教育の基本としている。

この「環境を通した教育」は間接性の原理によって行われる。間接性の原理には、教師の指導意図が、直接的に言葉や行動で子どもに向かうのではなく、環境を通して間接的に働きかけるという作用がある。その作用から、間接性の原理は子どもの自発性を損なわないとされている。

しかし、子どもの自発性が、外部からの影響ではなく、その子ども自身の中で思考され、行動することで発揮されるのであれば、教師によって準備された環境が、子どもの自発性を制限することも考えられる。その問題に対して、レッジョ・エミリアでは注目すべき実践が行われている。

レッジョ・エミリアとは、北イタリアのエミリア・ロマーニャ地方に位置する小都市である。レッジョ・エミリアでは、環境を通した間接性の原

理のもと、対話を通して学びを深めてく。そこで実践を見ていくと、子どもが自発的に行動している姿が見えてくる。つまり、レッジョ・エミリアでは子どもの自発性をどのように発揮させるのか、という問題に対して独自のアプローチがなされているのではないかと考えられる。

したがって、本研究は対話を通した学びを分析の視点とし、子どもの自発性をどのように発揮させるのか、という観点から、レッジョ・エミリアにおける「環境を通した教育」の特質を明らかにすることを目的とする。そして、レッジョ・エミリアにおける「環境を通した教育」の特質を明らかにすることで、「環境を通して行う教育」の課題と可能性を提示できると考えられる。

**【論文構成】**

序 章 問題意識と研究目的

第1章 レッジョ・エミリアの幼児教育の概要

第1節 レッジョ・エミリアの歴史・制度

第2節 ローリス・マラグッツィの思想

第3節 レッジョ・エミリア・アプローチ

第2章 プロジェクト活動「群集」の検討

第1章 テーマ設定

第2章 活動の展開

第3章 分析と考察

第3章 プロジェクト活動「円柱の洋服」の検討

第1章	テーマ設定
第2章	活動の展開
第3章	分析と考察
終章	「環境を通した教育」の課題と新たな可能性

### 【研究の概要】

第1章では、レッジョ・エミリアの幼児教育の概要を整理し、レッジョ・エミリアの教育実践を支える背景を明らかにした。第1節ではレッジョ・エミリアの歴史的背景、制度的特徴、教師教育を明らかにした。第2節では、レッジョ・エミリアの中心的指導者であったローリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi, 1920-1994) の生涯と理論的背景を整理し、「共同性」と「創造性」の理論を中心に、レッジョ・エミリアの教育理論を包括的に述べた。第3節では、レッジョ・エミリアの実践の中から観察と対話を取り上げ、その位置づけを示した。

第2章では、「群集」のプロジェクトを取り上げ、その分析と考察を行なった。第1節では、プロジェクトの概要とその背景を明らかにし、第2節では、子どもたちの会話と活動の過程から、プロジェクトの展開を視覚的に示した。第3節では、子どもたちの、言語表現と描画表現との間に生じた認識のズレに着目し、分析と考察を行なった。

子どもたちは、対話を通して互いの意見を対立させていく。その結果、認識のズレに子ども自身が気づき、解決に向けて活動を進めていった。その気づきによって、子どもは自発的に自分の考えを再構成しようとした。つまり、批判を越えて自身の矛盾に気付いたときに自発性が発揮されると考えられる。

第3章では「円柱と洋服」のプロジェクトを取り上げた。第1節では、第2章と同様にプロジェ

クトの概要と背景を明らかにし、第2節では、資料としてドキュメンテーションを用いて、その展開を示した。第3節では、ゴムを切り抜くという作業から生まれた、失敗や葛藤に焦点をあて、分析と考察を行なった。

子どもたちは、ゴムという素材との対話を行い、失敗や葛藤を通して、学びを深めていった。そのような混乱を乗り越える過程で、自身の経験を通して自発性を発揮し、新しい発想を手に入れることが出来た。その分析を通して、子どもの経験と自発性との関係を述べた上で、混乱を乗り越えるために自発性が必要であることを指摘した。

終章では、以上の考察を踏まえて、レッジョ・エミリアにおける「環境を通した教育」の特質として、①「対立する対話」②「混乱を生む対話」を挙げ、その特質によって子どもが自分自身と対話を行うことが出来ることを明らかにした。

その考察から、「環境を通した教育」の課題として、「間接性の作用には、子どもが自分自身と対話を行う機会を奪っている危険性を含んでいる」ことを指摘した。そして、その課題を乗り越え、子どもの自発性を保障し、発揮していくことが出来れば、「環境を通した教育」は子どもに内発的な動機を与えるだけでなく、子どもが社会と関わっていくために有効な手段と方法となることを述べた上で、「環境を通した教育」の新たな可能性として、「子どもと環境の相互関係が成立する」ということを示した。

最後に今後の課題としては、①実際の活動の様子がわかる媒体を用いて検証すること、②子どもたちの追跡的な検証、③他の対象から「環境を通した教育」見ていくこと、の3点を挙げた。

主任指導教員 渡邊隆信  
指導教員 渡邊隆信